

夏目漱石

倫敦消息





# 倫敦消息



## 一

(前略) それだから今日きょうすなわち四月九日の晩をまる潰つぶしにしてなにか御報知を仕ようと思う。報知したいと思う事はたくさんあるよ。こちらへ来てからどういうものかいやに人間が真面目まじめになってね。いろく々な事を見たり聞きたりするにつけて日本の将来という問題がしきりに頭の中に起る。柄がらにないといつてひやかしたまうな。僕

のようなものがかゝる問題を考えるのは全く天氣のせい  
や「ビステキ」のせいではない天の然しからしむるところだ  
ね。この国の文学美術がいかにか盛大で、その盛大な文学  
美術がいかにか国民の品性に感化を及ぼしつゝあるか、こ  
の国の物質的開化がどのくらい進歩してその進歩の裏面  
にはいかなる潮流が横よこたわりつゝあるか、英国には武士  
という語はないが紳士という言葉があつて、その紳士はい  
かなる意味を持つてゐるか、いかに一般の人間が鷹揚おうようで  
勤勉であるか、いろく目につくと同時にいろい癩しやく  
に障さわる事が持ち上あがつてくる。時にはイギリスがいやにな

つて早く日本へ帰りたくなる。するとまた日本の社会の  
有様ありさまが目に浮んでたのもしくない情けなさないような心持に  
なる。日本の紳士が徳育、体育、美育の点において非常  
に欠乏しているという事が気にかゝる。その紳士がいか  
に平気な顔をして得意であるか、彼等がいかに浮華であ  
るか、彼等がいかに空虚であるか、彼等がいかに現在の  
日本に満足して己等おのれらが一般の国民を墮落の淵ふちに誘いつゝ  
あるかを知らざるほど近視眼であるかなどというような  
いろく／＼な不平が持ち上ってくる。先だって日本の上流  
社会の事に関して長い手紙を書いて親戚へやった。しか

しこんな事はただ英国へ来てからよけいに感ずるようになったまででちつとも英国と関係のない話だし、君等に聞せる必要もなし、聞きたいことでもなからうからまずぬきとしてなにか話そう。何がいゝか、話そうとすると出ないものでね、困るな。仕方がないから今日起きてから今手紙をかいているまでの出来事を「ホトトギス」で募集する日記体でかいてお目おもしろにかかけよう。出来事だつて風来山人ふうらいさんじんの生活だから面白可笑おもしろおかしい事はない、すこぶる平凡な物さ。「オキスフォード」で「アン」を見失ったとか、「チエヤリング・クロス」で決闘を見たとかいう



のだと張合はりあいがあるが、いかにも憫然びんぜんな生活だからくだらない。しかし僕がロンドンに来てどんな事をやっているかがちよつと分わかる。僕を知っている君等にはそこに少々興味があるだろう。

この前の金曜が「グード・フライデー」で「イースター」のお祭の初日だ。町の店はみんなやすんで買物などはいっさい禁制だ。明あくる土曜はまず平常のとおりで、次が「イースター・サンデー」また買物を禁制される。翌日になつてもう大丈夫と思うと、今度は「イースター・モンデー」だといふのでまた店をとじる。火曜になつて

ようやくもとに復する例である。内の夫婦はお祭中じゅういなか田舎の妻君の里へ旅行した。田中君は「シエクスピヤ」の旧跡を探るといので「ストラトフォードオンアヴオン」という長い名の所へ行かれた。跡あとは妻君の妹と下女のペンと吾輩わがはいと三人である。

朝日がさめると「シャツター」の隙間すきまから朝日がさし込んで眩まぶしいくらいである。これは寝過ねすぎしたかと思つて枕の下から例のニツケルの時計を引きずり出して見るとまだ七時二十分だ。まだ第一の銅羅どらの鳴る時刻でない。起きたつて仕方がないが別にねむくもない。そこでぐる

りと壁の方から寝返りをして窓の方を見てやった。窓の  
 両側から申もうしわけ訳のために金巾カナキンだか麻あしだか得えたい体の分わからない  
 窓掛が左右に開かれています。その後うしろに「シャツター」  
 が下おりていて、その一枚くくのすき間からお天道てんとうさま様が御  
 光来である。ハ、ーいよく春はるめいてきて有あり難がたい、こん  
 な天気はロンドンじゃ拝はめなかうと思おっていたが、や  
 はり人間の住すんでる所だけああって日ひのあたることもある  
 んだなとちよちつと悟さとりを開ひいた。それから天井を見みた。  
 不あいか相わ変らひらずずが入はいっていて不景ふけい気だ。上かでなにかごとく  
 いう音が聞きこえる。下女へやが四階よの室むで靴くつでもはいている

んだらう。部屋はますますあかるくなる。銅羅はまだ鳴り  
 そうな景色がない。今度は天井から眼をおろしてぐる  
 ぐる部屋中を検査した。しかし別に見るものもなににも  
 ない。まことにお恥はずかしい部屋だ。窓の正面に箆たんす筒があ  
 る。箆筒ひきだしというのは勿体もったいない、ペンキ塗ぬりの箱だね。上の  
 引出ひきだしに股引もゝひきとカラとカフがはいつていて、下には燕尾服えんびふく  
 がはいつている。あの燕尾服は安かったがまだ一度も着  
 たことがない。つまらないものを作ったものだなと考  
 えた。箱の上に尺四方ばかりの姿見すがたみがあつてその左ひだりに「カ  
 ル、ス」泉の瓶びんが立たっている。その横から茶色のきたない

皮の手袋が半分見える。箱の左側の下に靴が二足、赤と黒だ、並んでいる。毎日穿くのは戸の前に下女が磨いて置いてゆく。そのほかに礼服用の光る靴が戸棚に仕舞つてある、靴ばかりはなか／＼大臣だなど少々得意な感じがする。もしこの家を引越すとするところの四足の靴をどうして持って行こうかと思いだした。一足は穿く、二足は革靴かわかばんにつまるだろう、しかし余る一足は手にさげるわけにはゆかんな、裸で馬車の中へ投り込むか、しかし引越すまえには一足はたしかに破れるだろう。靴はどうでもいゝが大事の書物がずいぶん厄介だ。これはたいへ

んな荷物だなど思つて板の間に並べてある本と、煖炉の上にある本と、机の上にある本と、書棚にある本を見回した。先だつて「ロツチ」から古本の目録をよこした「ドツズレー」の「コレクション」がある。七十円は高いが欲しい。それに製本が皮だからな。このまえ買った「ウアートン」の英詩の歴史は製本が「カルトバー」で古色蒼然そうぜんとしていて実に安い掘出し物だ。ほりだしかし為替かわせが来なくつては本も買えん、少々閉口するな、そのうち来るだろうから心配することもあるまい、……ゴンくくくそら鳴った。第一の銅羅だ、これから起きて仕度したくをすると第二

の「ゴング」が鳴る。そこでノソク下へ降りて行って朝食を食うのだよ。起きて股引を穿きながら、子ねにふし銅羅に起きはどうだろうと思つて一人でニヤクと笑つた。それから寢台を離れて顔を洗う台の前へ立つた。これからお化粧が始まるのだ。西洋へ来ると猫が顔を洗うように簡単にゆかんでまことに面倒である。瓶の水をジャーと金盥かなだらひの中へあけてその中へ手を入れたがああ仕舞つた顔を洗うまえに毎朝カル、ス塩を飲まなければならぬと気がついた。入れた手を盥から出した。拭くのが面倒だから壁へむいて二三返手をふつてそれから

「カルルス」塩の調合にとりかゝった。飲んだ。それからちよつと顔をしめして「シエヴィング・ブラツシ」を攫つかんで顔中むやみに塗ぬり回す。剃そりは安全髮剃かみそりだから仕まつがいゝ。大工がかんなをかけるようにスースーと髭ひげをそる。いゝ心持だ。それから頭へ櫛くしを入れて、顔を拭ふいて、白シヤツを着て、襟えりをかけて、襟飾えりかざりをつけて「シヤツター」を捲まき上あげると、下女がボコンと部屋の前へ靴をたゝきつけて行つた。しばらくすると第二のゴンクが鳴る。ちよつとお誂あつらえどおりにできてる。それから階はし子段ごだんを二つ下おりて食堂へはいる。例のごとく「オートミール」を第



一に食う。これはスコットランド人の常食だ。もつともあつちでは塩を入れて食う、我々は砂糖を入れて食う。麦のお粥かゆみたようなもので我輩わがはいは大好きだいすきだ。「ジョンソン」の字引には「オートミール」……蘇国そこくにては人が食う英国にては馬が食うものなりとある。しかし今の英国人としては朝食にこれを用いるのがべつだん例外でもないよ。うだ。英人が馬に近くなつたんだらう。それから「ベーコン」が一片に玉子たまご一つまたはベーコン二片と相場がきまっている。そのほかに焼パン二片茶一杯、それでお仕舞しまいだ。吾輩が二片の「ベーコン」を五分の四まで食いました。

たところへ田中君が二階から下りて来た。先生は昨夜遅く旅から帰って来たのである。もつとも先生は毎朝遅刻する人で決して定刻に二階から天下あまくだったことはない。「いやお早はよう」。妻君の妹が Good morning と答えた。吾輩も英語で Good morning といった。田中君はムシヤムシヤやっている。吾輩は Excuse me といって食卓の上にある手紙を開いた。「エツジヒル」夫人からこの十七日午後三時にゆるくお話しを伺いたいからお出下いでくだされまじくやという招待状だ。おやくと思つた。吾輩は日本におつても交際は嫌きらいだ。まして西洋へ来て無弁舌なる

英語でもって窮窟きゆうくつな交際きざいをやるのはもつとも厭きらいだ。  
 加くわ之わうロンドンには広いから交際きざいなどを始めるとむやみに  
 時間をつぶす、おまけにきたない「シャツ」などは着て  
 行かれず、「ズボン」の膝ひざが前へせり出してはまず  
 いし雨のふる時などはなさけない金を出して馬車などを  
 驕おごらねばならないし、それはそれは氣骨きぼねが折おれる、金が入  
 る、時間が費ついえる、真平まっぴらだが仕方がない、たまにはこん  
 な酔興よきょうな貴女があるんだから行かなければ義理がわる  
 い、困ったなと思つていると、田中君が旅行談を始めた。  
 吾輩われらに「シエクスピヤ」の石膏製せっこうせいの像と「アルバム」を

やろうと言うから難有うありがとといつて貰もらった。それから「シ  
エクスピヤ」の墓碑の石摺いしすりの写眞を見せて、こりや何だ  
い君、英語の漢語だね、僕には読めないといつた。やが  
て先生は会社へ出て行つた。これから吾輩は例のとおり  
「スタンダード」新聞を読むのだ。西洋の新聞は実にて  
がある。始はじめから仕舞しままで残らず読めば五六時間はかゝ  
るだろう。吾輩はまず第一に支那しな事件じけんのところを読むの  
だ。今日けふのには魯国ろこく新聞しんぶんの日本に対する評論がある。も  
し戦争をせねばならん時には日本へ攻め寄せるは得策で  
ないから朝鮮で雌雄を決するがよからうという主意であ

る。朝鮮こそ善い迷惑だと思った。その次に「トルストイ」の事が出ている。「トルストイ」は先日ロシアの国教を蔑視するといふので破門されたのである。天下の「トルストイ」を破門したのだから大騒ぎだ。ある絵画展覧会に「トルストイ」の肖像が出ているとその前に花が山をなす、それから皆が相談して「トルストイ」になにか進物をしようなんか「トルストイ」連は躍気になつて政府に面当をしていふ通信だ。面白い。そうこうするうちに十時二十分だ。今日は例のごとく先生の家へ行かねばならない。まず便所へ行つて三階の部屋へか

け上って仕度したくをして下りてみるとまだ十一時には二十分ばかり間がある。また新聞を見る。昨日は「イースター・モンデー」なので所々で興行物があった。その雑報がある。「アクエリウム」で熊くまつか使いが熊を使うということが載のっている。熊が馬へ乗って埒らちの周囲をかけ回る、棒を飛び超こえる、輪抜けをすると書いてある。面白そうだ。この度たびは広告を見た。「ライシウム」で「アーヴィング」が「シエクスピヤ」の「コリオラナス」をやると出ている。先だって「ハー・マジエスチー」座で「トリー」の「トエルフスナイト」を見た。脚本で見るよりはるかに

面白い。「アーヴィング」のも見たいものだ。十一時五分まえになった。書物を抱かゝて家を出た。

僕の下宿は東京でいえばまず深川ふかがわだね。橋向うの場末さ。下宿料が安いからかゝる不景気な処ところにしばらく——じゃない、つまり在英中は始終蟄息ちっそくしているのだ。

その代り下町へはめったに出ない。一週に一二度出るばかりだ。出るとなると厄介だ。まず「ケニントン」という処まで十五分ばかり歩行あいて、それから地下電気でもって「テームス」川の底を通って、それから汽車を乗換のりかえて、いわゆる「ウエスト・エンド」辺に行くのだ。停

車場まで着て十銭払って「リフト」へ乗った。連が三四人ある。駅夫が入口をしめて「リフト」の繩をウンと引くと「リフト」がグーツとさがる、それで地面の下へ抜け出すという趣向さ。せり上る時はセビロの仁木弾正だね。穴の中は電気灯であかるい。汽車は五分ごとに出る。今日はすいている、善按排だ。隣りのものも前のものも次の車のものも皆新聞か雑誌を出して読んでいる。これが一種の習慣なのである。吾輩は穴の中ではどうしても本などは読めない。第一空気が臭い、汽車が揺れる、たゞでも吐きそうだ。まことに不愉快極まる。停車場を四



ばかりこすと「バンク」だ。こゝで汽車を乗りかえて一ひとつの穴からまた他の穴へ移るのである。まるでもぐら持ちだね。穴の中を一町ばかり行くといわゆる two pence Tube 也。これは東「バンク」に始まってロンドンをズツト西へ横断している新しい地下電気だ。どこで乗ってもどこで下りても二文おにもんすなわち日本の十銭だからこういう名がついている。乗った。ゴーといって向うの穴を反対の方角に列車が出るのを相図あいずに、こっちの列車もゴーといつて負けない気で進行しはじめた。車掌が next station Post-office といつてガチャリと車の戸を閉めた。

とまるたびにつぎの駐車場の名を報告するのがこの鉄道の特色なのである。向うの方に若い女と四十恰好かっこうの女が差し向むかいに座を占めていた。吾輩の右に一間へだたばかり隔へだたって婆さんと娘がベチャク話をしてる。向うの連中は雑誌を読みながら「ビスケット」かなにかかじっている。平凡な乗合だ。少しも小説にならない。もう厭いやになったからこれで御免蒙こうむる。実は僕の先生の話をしたいのだがね。よほど奇人で面白いのだから。しかし少々頭がいたいからこれで御勘弁を願おう。四月九日夜。

## 二

また「ホトトギス」が届いたから出直して一度伺おう。  
 我輩わがはいの下宿の体裁は前回申し述べたごとくすこぶる憐れあわ  
 っぽい始末だが、そういう境界に澄まし返かえって三十代の  
 顔がん子然しぜんとしていられるかと君がたはきつと聞くに違いな  
 い。聞かなくつても聞くことにしないとこつちが不都合  
 だからまず聞くと認める。ところで我輩が君等らに答える  
 んだ、懸かけ価ねのないところを答えるんだから、そのつもり

で聞かなくってはいけない。

我輩も時には禅坊主みたような変哲学者のような悟り  
すましたことも言ってみるが、やはりだいたいのところ  
が御存じのごとき俗物だからこんな窮屈な暮しをして回  
やその樂たのしみをあらためず賢なるかなと褒めほられる権利は  
もうとうないのだよ。そんならなぜもつと愉快な所へ移  
らないかと言うかもしれないが、そこに大いに理由の存  
するありえん焉さ。まず聞きたまえ。なるほど留學生の学資  
はお話にならないくらい少ない。ロンドンではなおく  
少ない。少ないがこの留学費全体を投じて衣食住のほう

へ回せば我輩といえども、もすこしは楽な生活ができるのさ。それは国にいる時分の体面を保つことは覚束ないおぼつかが（国にいれば高等官一等から五つ下へ勘定すればすぐ僕の番へ巡まわってくるのだからね。もつとも下から勘定すれば四つで来てしまうんだから日本でもあまり威張いばれないが）とにかくこれよりも薩張さつぱりした家へはいれる。しかるにあらゆる節儉をしてかようなわびしい住居すまいをしているのはね、一つは自分が日本におった時の自分ではない単に学生であるという感じが強いのと、二つ目にはせつかく西洋へ来たものだからなることなら一冊でもよ

けい専門上の書物を買って帰りたいたい欲があるからさ。そこで家を持って下婢共かひどもを召し使ったことは忘れて、ただ十年前大学の寄宿舍で雪駄せったのカカトのような「ビステキ」を食った昔を考えてはそれよりも少しは結構？　まず結構だと思っっているのさ。人は「カムバーウエル」のような貧乏町にくすぼってると言っただ笑うかもしれないがそんな事に頓着とんじやくする必要はない。かような陋巷ろうこうにおったって引張りひっぱと近づきになつたこともなし夜鷹よたかと話をしたこともない。心の底までは受合うけあわないがまず挙動だけは君子のやるべき事をやっているんだ。実に立派なものだ

とみずから慰めている。

しかしながら冬の夜のヒュー〜風が吹く時にストー  
ヴから烟けむりが逆戻ぎやくもどりをして室へやの中が真黒に一面くすぶに燻る  
ときや、窓と戸の障子の隙間すきまから寒い風が遠慮なくはい  
りこんで股またから腰のあたりがたまらなく冷たい時や、板  
張の椅子いすが堅くって疝氣持せんきもちの尻のように痛くなるとき  
や、自分の着ている着物がだん〜変色してくるにつれ  
て自分がだん〜下落するような情ない心持のする時  
は、なんのためにこんな切り詰つめた生活をするんだらう  
と思うこともある。エー構わない。本もなにも買えなく

ても善<sup>い</sup>いから為替<sup>かわせ</sup>はみんな下宿料にぶち込んで人間らし  
 い暮しを仕<sup>し</sup>ようという気になる。それからステッキでも  
 振り回わしてその辺を散歩するのである。向<sup>むこう</sup>へ出てみ  
 ると逢<sup>あ</sup>う奴<sup>やつ</sup>もく<sup>く</sup>皆<sup>み</sup>んな厭<sup>いや</sup>に背<sup>せ</sup>いが高い。おまけに愛嬌<sup>あいぎょう</sup>  
 のない顔ばかりだ。こんな国ではちっと人間の背いに税  
 をかけたら少しは儉約した小さな動物が出来るだらうな  
 どと考えるが、それはいわゆる負<sup>まけ</sup>惜<sup>お</sup>しみの減<sup>ぐち</sup>らず口<sup>ぐち</sup>とい  
 う奴で、公平なところが向<sup>むこ</sup>うのほう<sup>ほう</sup>がどうしても立派だ。  
 なんとなく自分が肩身の狭い心持<sup>こころも</sup>ちがする。向<sup>むこ</sup>うから人<sup>にん</sup>  
 間<sup>げんなみはず</sup>並外れた低い奴が来た。占<sup>しめ</sup>たと思<sup>おも</sup>ってすれ違<sup>ちが</sup>ってみる



と自分より二寸ばかり高い。こんどは向うから妙な顔色をした一寸法師が来たなと思うと、これすなわち乃公だいこう自身みづかみの影が姿見に写ったのである。不得已やむをえず苦笑いをすると向うでも苦笑いをする。これは理の当然だ。それから公園へでも行くと角兵衛獅子かくべえしに網を被かぶせたような女がぞろぞろ歩あ行るいている。そのなかには男もいる。職人もいる。感心たいがいに大概は日本の奏任官以上の服装をしている。この国では衣服では人の高下わかが分らない。牛肉配達などが日曜になるとシルクハットでフロックコートなどを着て澄すましている。しかし一般に人気が善よい。我輩などを捕えて

悪口をついたり罵のゝしつたりするものは一人ひとりもおらん。ふり向いても見ない。当地では万事おうよう鷹揚に平氣にしているのが紳士の資格の一つとなっている。むやみに巾着きんちやく切りのようにこせくしたり物珍ものめずらしそうにじろくく人の顔なんどを見るのは下品となっている。ことに婦人などは後ろうしを振りかえって見るのも品が悪いとなっている。指で人をさすなんかは失礼の骨頂だ。習慣がこうであるのにさすがロンドンロンドンは世界の勸工場だからあまり珍らしそうに外国人を玩弄がんろうしない。それからたいいてい人間は非常に忙いそがしい。頭のなか金が金の事で充満しているから

日本人などを冷<sup>ひや</sup>かしている暇がないというようなわけ  
 で、我々黄色人——黄色人とは甘<sup>うま</sup>くつけたものだ。全く  
 黄色い。日本にいる時はあまり白いほうではないがまず  
 ひととおりの人間色という色に近いと心得ていたが、こ  
 の国ではついに人——人間——を——去——る——三——舎——色と言わざるを  
 得ないと悟った——その黄色人がポクく人<sup>ひと</sup>込<sup>こみ</sup>の中を歩  
 行いたり芝居や興行物などを見に行かれるのである。し  
 かし時々是我輩に聞えぬように我輩の国元<sup>くにもと</sup>を気にして評  
 する奴がある。このあいだある所の店に立って見ていた  
 ら後ろから二人の女が来て“least poor Chinese”と評し

て行つた。least poor とは物匂(ママ)い形容詞だ。ある公園で男女二人連があれば支那人だいや日本人だと争つていたのを聞いたことがある。二三日前さる所へ呼ばれてシルクハットにフロックで出掛けたら、向うから来た二人の職工みたような者が a handsome Jap. といつた。難有ありがたいんだか失敬なんだか分わからない。先んだけあってある芝居へ行つた。大入おおいりではいれないからガレリーで立見をしていると傍かたわらのものが、あすこにいる二人はポルトガル人だろうと評していた。——こんな事を話すつもりではなかつた。話しの筋が分らなくなつた。ちよつと一服してから出直

そう。

まず散歩でもして帰るとちよつと気分が變つて来て晴々する。なにこんな生活もたゞ二三年のあいだだ。国へ帰れば普通の人間の着る物を着て普通の人間の食う物を食つて普通の人の寝る処へ寝られる。少しの我慢<sup>がまん</sup>だ、我慢しろく、と独り言<sup>ひとりごと</sup>をいって寝てしまふ。寝てしまふ時は善<sup>い</sup>いが、寝られないでまた考え出すことがある。元來我慢しろというのは現在に安んぜざるわけだ——だんだん事件がむずかしくなつてくる——時々やけの気味になるのは貧苦がつらいのだ。年来自分が考えた、また

自分が多少実行し来りたる処世の方針はどこへ行つた。前後を切断せよ、みだりに過去に執着するなかれ、いたずらに将来に望を属するなかれ、満身の力をこめて現在に働けというのが乃公だいこうの主義なのである。しかるに国へ帰れば樂ができるからそれを樂しみに幸防しんぼうしようというのは果敢はかない考かんがえだ。国へ帰れば樂をさせると受合うけあつたものは誰もない。自分がきめてい**る**ばかりだ。自分がきめてもいゝから樂ができなかつた時にすぐ機鋒きほうを転じて過去の妄想を忘却し得ればいゝが、今のように未来にお願い申しているようではとうていその未来が満足せられ

ずに過去と変じた時にこの過去をさらりと忘れることは  
 できまい。のみならず報酬を目的に働らくのは野暮やぼの至  
 りだ。死ねば天堂へ行かれる、未来は雨蛙あまがえるといっしよ  
 に蓮はすの葉に往生ができるから、この世で善行をしようとい  
 う下卑げびた考と一般の論法で、それよりもなおいっそう  
 陋劣ろうれつな考だ。国を立つ前五六年のあいだにはこんな下等  
 な考は起さなかつた。たゞ現在に活動したゞ現在に義務  
 をつくし現在に悲喜憂苦を感ずるのみで、取越とりこし苦勞や世よ  
 迷言まいごや愚痴ぐちは口の先ばかりでない腹の中にもたくさんな  
 かつた。それで少々得意に成つたので外国へ行つても金

が少なくつても一<sup>いったん</sup>箆の食<sup>し</sup>一<sup>びよう</sup>瓢の飲<sup>いんぜん</sup>然と吞<sup>のんき</sup>氣に洒<sup>しゃらく</sup>落<sup>うぬぼれ</sup>にま  
 た沈着に暮されると自負しつゝあつたのだ。自惚自  
 惚！ こんな事では道を去る事三千里。まず明日からは  
 心を入れ換えて勉強専門の事。こう決心して寝てしまふ。  
 かゝる有<sup>ありさま</sup>様でこの薄<sup>むさくる</sup>暗い汚<sup>むさくる</sup>苦しい有名なカンバーウエ  
 ルという貧乏町の隣町に昨年の末から今日<sup>きょう</sup>までおつたの  
 である。おつたのみならず、このさきも留学期限のきれ  
 るまではここにおつたかもしれぬのである。しかるにこ  
 こにある出来事が起つて、いくらおりたくつても退去せ  
 ねばならぬこととなつた、というとなにか小説的だが、



その訳を聞くとすこぶる平凡さ。世の中の出来事の大半は皆平凡な物だから仕方がない。この家はもとからの下宿ではない。去年までは女学校であつたので、こゝの神さんと妹が経験もなく財産もなく将来の目的もしかと立たないのに自営の道を講ずるためにこの上品のような下等のような妙な商買を始めたのである。彼等はもとより不正な人間ではない。正道を踏んで働けるだけ働いたのだ。しかし耶蘇教やそきょうの神様も存外半間はんまなもので、こういう時にちよつと人を助けてやることを知らない。そこでもって家賃が滞とどこおる——ロンドンの家賃は高い——借金

ができる、寄宿生の中に熱病が流行る。一人退校する、  
 二人退校する、仕舞に閉校する。……運命が逆まに回  
 転するところゆくものだ。可憐なる彼等——可憐は取消  
 そう二人とも可憐という柄ではない——エー不憫なる  
 ——憫然なる彼等はいくまでも困難と奮戦しようという  
 決心でついに下宿を開業した。その開業したての烟の  
 出ているところへ我輩は飛び込んだのである。飛び込ん  
 でからだなく事情を聞いたときにこんどこそはこの二  
 人の少女、ではない我輩より三寸ばかり背いの高い女に  
 成功あらしめたまえとひそかに祈念を凝らした。誰れに

祈念を凝らしたと聞かれると少々困る。祈るべき神に交  
 際のせつしやない拙者だから、たゞあてどもなく祈念した。果はたせ  
 るかないっこう靈現がない。ちつとも客が来ない。「夏  
 目さん、あなたの御存じのかたでいらしつていたゞくか  
 たはありますまいか」「さよう、実にお氣の毒だから周  
 旋したいのだが、ロンドンには別に朋友ほうゆうというものがな  
 いから——」。それでも先だつてまでは日本人が一人お  
 った。この先生はすこぶる陽気な人でこんな家には向か  
 ない。我輩がほとゝぎすを讀んでいるのを見て、君も天てん  
 智ちてんのう天皇のほうはやれるのかいと聴きた男だ。その日本人が

とうく逃出<sup>にげだ</sup>す。残るは我輩一人だ。こうなると家を畳<sup>たた</sup>むより仕方がない。そこでこれから南の方にあたるロンドン<sup>はす</sup>の町外れ——町外れと云つてもロンドン<sup>はす</sup>は広い、どこまで広がるか分らない——その町外れだからよほど辺<sup>へん</sup>鄙<sup>び</sup>な処<sup>ところ</sup>だ。そこに恰好<sup>かつこう</sup>な小奇麗な新宅があるのです、そこへ引越そうという相談だ。ある日亭主と神<sup>かみ</sup>さんが出て行って我輩と妹が差し向いで食事をしてしていると陰気な声で「あなたもいつしよに引越してくださいますか」といった。この「くださいますか」が色<sup>いろ</sup>気<sup>け</sup>のある小説的の「くださいますか」ではない。色<sup>つ</sup>沢<sup>や</sup>気<sup>け</sup>抜きの世帯<sup>しやたい</sup>染<sup>じみ</sup>た「くだ

さいますか」である。我輩がこの語を聞いたときは非常にいやな可愛想な気持ち<sup>しゅびきない</sup>がした。元来我輩は江戸っ児<sup>こ</sup>だ。しかるに朱引内<sup>しゅびきない</sup>か朱引外<sup>そと</sup>か少々曖昧<sup>あいまい</sup>な所で生れた精かしらん今まで江戸っ児のやるような心持ちのいゝ慈善的事業をやったことがない。今なんと答をしたかたしかに覚えておらん。いやしくも一遍の義侠<sup>ぎぎょうしん</sup>心があるならば、うんあなたの移る処ならどこでも移ります、と答えるはずなのだ。そうは答えなかつたらしい。こゝにそう答えられない訳がある。なるほどこの妹はごく内気<sup>おとな</sup>な大人しいしかも非常に堅固な宗教家で、我輩はこの女と家をと

もにするのは毫ちひさも不愉快を感じないが、姉のほうたる  
 少々お転てんだ。この姉の経歴談も聞きいたが長くなるから抜き  
 にして、ちよつと小生の気に入らない点を列举するなら  
 ば、第一生意なまい気だ、第二知ったか振ぶりをする、第三詰つまら  
 ない英語を使ってあなたはこの字を知っておいでですか  
 と聞くことがある。一々勘定すれば際限がない。先だつ  
 てトンネルという字を知っているかと聞た。それから  
 straw すなわち藁わらという字を知っているかと聞た。英文  
 学専門の留学生もこうなると怒おこる張合はりあいもない。近ごろは  
 少々見当ついでが付たと見えてそんな失敬な事も言わない。ま

た一般の挙動も大いに叮嚀ていねいになった。これは漱石が一言あらしの争あらしもせず冥々の裡うちにこのお転婆てんばを屈伏せしめたのである。——そんな得意談はどうでも善よいとして、この国の女ことに婆さんとくると、いわゆる老婆親切というわけかもしれんが、自分の使う英語に頼みもせぬ註解を加えたり、この字は分りますかなどということがたくさんある。このあいださる処へ呼ばれてそこの奥さんと談はなしをした。するとその人が大の耶蘇信者だからたまらない。滔々と神徳を述べ立てた。まことに品の善い、しとやかなお婆さんだ。しかる処 evolution という字を御承知で

すかと聞かれた。「世の中の事は乱雑で法則がないよう  
ですがよく御覧になると皆進化の道理に支配されており  
ます……進化……分りますか」。まるで赤ん坊に説教す  
るようだ。向<sup>むこう</sup>は親切に言ってくれるんだから、へーへ  
ーと言っているより仕方がない。それはこの婆さんのよ  
うにベラく<sup>しやべ</sup> 嘍舌<sup>あが</sup>することはできない。挨拶<sup>あいさつ</sup>などもたゞ  
咽喉<sup>のど</sup>の処へせり上<sup>あが</sup>って来た字を使ってほっと一息つくく  
らいの仕儀なんだから、向うでこっちを見くびるのは無  
理はないが、離れぐ<sup>ぐ</sup>の言語の数からいえばあなたより  
も我輩のほうがよけい知っておりますよといつてやりた



いくらいだ。それからよくお婆さんを引合ひきあいに出すが、もう一人お婆さんがある。このお婆さんが先だつて手紙をよこしてその中に Folk という字を使っている。たゞ使っているばかりなら不思議はないが、その字に foot note が付いている。これは英国古代の字なりとあつた。「ノート」を自分の手紙へつけるのも面白いが、そのノートの文句がなおさら面白い。このお婆さんと船あいのりへ合乗をした時に、なにか文章を書け、直してやるというから、日記の一節を出して宜敷よろしくお頼たのもうすことにした。するとたいへん感心したといつて二三所一二字添削して返した。

見ると直さなくつても決して差支のないところを直して  
いる。そして飛とんでもない間違まちがった事が例のノートの書  
いてある。このお婆さんはけっして下等な人でない。相  
応な身分のある中流の人である。かくのごとき人間に邂かい  
逅こうする英国だから、わが下宿の妻君が生意気な事を言う  
のもべつだん相手にする必要はないが、同じ英国へ来た  
くらいならいま少し学問のある話せる人の家におつて、  
汚きたない狭いは苦にならないから、どうか朝夕交際がして  
みたい。こういう望のぞみがあるから、へー行きましたようと  
は答えなかつたが、自分の望みどおりの人で下宿人を置

く処があるかそれがすこぶる疑わしい。広い世界にはあるだろう。けれどもそれに逢着するほうちやくのは難中の難事である。我輩の先生の処が一間あいておれば置てもらうのだけれども、それは間がないのだからできない相談だ。こういう時になると西洋の新聞は便利だ。万事広告の境界なのだから下宿の広告がいくらでもある。我輩が以前下宿をさがす時 Daily Telegraph の下宿の広告欄を見たことがある。はじめから終りまで読むのに三時間かゝった事を記憶している。今は「テレグラフ」を取っておらん、「スタンダード」だ。この新聞は上品な新聞だから

こゝへ出る広告なら間違まちがはないと思つて四月十七日の分の広告欄を読みはじめると、存外營業的のが多くつて素人家しろうとやへ置きたいというのが少ない。しかしいろくのがある。「宿料低廉、風呂付ふろつき、食物上等」こんなのは普通なのだ。「ハイドパークに面し地下電気へ三分地下鉄道へ五分、貴女と交際の便利あり」なんというのがある。「球突たまつき随意ピアノあり gay society, late dinner」これも珍らしくない。「レートジンナー」というのはこのごろの流行なのだ。我輩などには至極不便だ。そのなかで下のようなを見出みいだした。「立派へやなる室を有する寡婦およ

びその妹とともに同宿せんとするあまり派出はでやかならざる紳士を求む。お望のぞみの方は〇〇筆墨店へ御一報を乞こう」。まずこゝへでも一つ中あたつてみようという気になったからすぐ手紙を書いて、宿料その他委細の事を報知してもらいたい、小生の身分はかくく職業はかくく、なるべく低廉でなるべく愉快な処に住みたいと勝手な事をかいてやった。

その夜の十時ごろ自分の室で読書をしていると、室の戸をコツ／＼叩たくものがある。「Yes, come in.」といったら宿の亭主がニコ／＼してはいつて来た。「実はあなた

も御承知のとおりこんど引越すことに極きめましたが、どう  
でしよう、向うはこゝよりもだいぶ奇麗でかつ器具など  
もよほど上等にしますが、来ていただくわけにはまいり  
ますまいか」「それは君の方で僕にぜひ来てくれと言う  
のなら……」「イエゼひといつて御無理を願うわけでは  
ありませんが、御都合がよければ——実はお馴染なじみにもな  
っておりますし家内や妹もたいへんそれを希望いたしま  
すから」「君の新宅へ下宿人を置きたいという事は僕も  
承知してはいますが、あながち僕でなくつても善いいだらう  
と思つてね」と実はこれこれだと話すと、亭主の顔が少々

陰気になつて来た。我輩も少々手持無沙汰てもちぶさたである。「それじゃこうしよう、いずれ先方から返事が来る、来ればひとまず行つて室を見て、それが気に入らなかつたら君の方へ行くとしよう、ほかを探すことはやめにして。あの手紙を出すまえに君の方の希望がどのくらいの程度だか分つていれば、聞き合わせるまでもないお望みに応じたのだが、こうなつては仕方がない。まず先方の返事次第ですね。その代りほかは決してさがさない。あれがいけなければきつと君の方へ行きますよ」。亭主はお邪魔様じやまさまといつて下りおて行つた。

朝になつて食堂へ行くと誰もいない。皆んな飯をすま  
したあとである。あゝ今日も寝坊して気の毒だなど思つ  
て「テーブル」の上を見ると、薄紫色の状袋の四隅を一  
分ばかり濃い堇色すみれいろに染めた封書がある。我輩に來た返  
事に違いない。こんな表の状袋もちいを用るくらいでは少々  
我輩の手に合わん高等下宿だなど思いながら「ナイフ」  
で開封すると、「お問い合わせの件につき申上げ候そろ。この  
家はレデーこのレデーという字の下に棒が引いてある）  
の所有にて室内の裝飾の立派なるはもちろん室々はこと  
ごとく電気灯を用ひよき召使を雇ひ高尚優雅なる生活に



適するように意を用ひ候。宿料は一週三十三円に御座候。あるひはお気に召さぬかと存じ候へども、お出下いでされ候さふらへば喜こんで室々御案内つかまつるべく候そろ、敬具」。飯を食いながら呼鈴よびりんを押して宿の神さんと呼んだ。「とうとうあなたの方へ行くことにしましたよ。一週三十三円の下宿料なんかとうてい我輩には払えんから君の方へ行きましようよ」「はあそうですか、どうも難有ありがとう、なるべく気を付つけますからどうぞさよう願ねがひたいもので」。細君が出て行ったあとから亭主の首が半分戸の間から出た。Thank you, Mr. Natsume, thank you. と言いつてニコニコ

コ笑った。我輩も少々嬉しいような心持ちがした。細君と妹は引越しの荷ごしらえで終日急がしい。七時に茶を飲むときに食堂で逢った。「今日は飼っていた鸚鵡を売りました」と妹がいった。姉もまけずに「前使った学校の招牌しょうはいも売りました。十円に買ってゆきました」と言った。

運命の車は容赦なく回転しつゝある。我輩の前および彼等二人の前にはいかなる出来事が横よこたわりつゝあるか。我等は三人ながら愚な事をしているかもしれぬ。愚かもしれぬ、また利口りこうかもしれぬ。たゞ我輩の運命が彼等二

人の運命とだんく接近しつゝあるは事実である。後を顧みてかの薄紫の貴女およびその妹の事とその門構もんがまえ付の家を想像し、前を見てこの貧困なるしかし正直なる二人の姉妹とその未来の楽園と予期しつゝある格子戸作を想像して、両者の差違を趣味あるようにも感ずる。また貧富の懸隔けんかくはかように色気なき物かとも感ずる。またミカウバーと住んでおったデヴィッド・カップパーフィードのような感じもする。四月二十日。

## 三

朋友ほうゆうその朋友とともに我輩わがはいが生活をともにする所の朋友姉妹の事については前回少しく述ぶるところあったが、このほかに我輩がもつとも敬服しもつとも辟易へきえきするところの朋友がまだ一人ひとりある。姓はペン渾名あだなは badge *pardon* なる聖人の事を少しく報道しないではなんだか気が済すまないから、同君の事をちよつとお話して、次回からは方面の変った日撃談觀察談を御紹介つかまつる

う。そもくこのペンすなわち内うちの下女なるペンになぜ我輩がこの渾名を呈したかというと、彼は舌が短かすぎるのか長すぎるのか呂律ろれつが少々回りかねる善人なるゆえに I beg your pardon どうう代りにいつでも budge pardon というからである。ベツジ・パードンは名のごとくいかにもベツジ・パードンである。しかし非常な能弁家で、彼の舌の先から唾液だえきを容赦なく我輩の顔面に吹きかけて話し立てる時などは滔々滾々として惜おしい時間を遠慮なく人に潰つぶさせて毫ごうも気の毒だと思わぬくらいの善人かつ雄弁家である。この善人にして雄弁家なるベツジ

パードンはロンドンに生れながらまるでロンドンの事を御存じない。田舎<sup>いなか</sup>はむろん御存じない。また御存じなさりたくもない様子だ。朝から晩まで晩から朝まで働き続けに働いてそれから四階のアツチツクへ登って寝る。翌日、日が出ると四階から天降<sup>あまくだ</sup>ってまた働き始める。息をセツセとはずまして——彼は喘息<sup>ぜんそくもち</sup>持である——はたから見ると毒の毒なくらいだ。さりながら彼は毫も自分に對して気の毒な感じを持っておらぬ。Aの字かBの字か見当のつかぬ彼は少しも不自由らしい様子がない。我輩は朝夕この女聖人に接して敬慕の念に堪<sup>た</sup>えんくらいの次

第であるが、このペンに捕つかままって話しかけられた時は幸か不幸かこれは他人に判断してもらうより仕方しかたがない。日本にいる人は英語なら誰の使う英語でもたいがい似たもんだと思っおもっているかもしれないが、やはり日本と同じ事で、国々の方言があり身分の高下がありなどして、それはそれは千違万別である。しかし教育ある上等社会の言語はたいたいいてい通とおずるから差支さしつかえないが、このロンドンのコックネーと称する言語に至いたっては我輩にはとうてい分わからない。これは当地の中流以下の用もちうる語ことばで字引にないような発音をするのみならず、前の言ことばと後の言ことば

の句切りが分らない、事ほどさよう早く饒舌しやべるのである。我輩はコックネーでは毎度閉口するが、ベツジ・パードンのコックネーに至つては閉口を通り過すごしてもう一遍閉口するまで少々草臥くたびれるから開口一番ちよつと休まなければやり切きれないくらいのものだ。我輩がこゝに下宿したてにはしばくペンの襲撃を蒙こうむつて恐縮したのである。不得やむをえず已この旨を神かみさんに届け出ると、可愛想かわいそうにペンはたいへんお小言こごとを頂戴ちようだいした。お客様にそんな無仕付ぶしつけな方ほうがあるものか以後はたしなむが善よかろうと極めつけられた。それから従順なるペンは決して我輩に口をきかない。



たゞし口をきかないのは妻君の内もとにいる時に限るので、山の神が外へ出た時には依然として故のペンである。故のペンが無言の業をさせられた口く惜やしまぎれに折おりを見て元利とも取返とりかえそうという勢いきおいでくるからたまらない。一週間むりに断食をした先生が八日目にお櫃ひつを抱えて奮戦するの慨おもむきがある。

例のごとくデンマークヒルを散歩して帰ると、我輩のためはたに戸を開いたるペンはただちに饒舌かたづけりだした。果せはたるかな家内のものは皆新宅へ荷物を片付かたづけに行つて伽藍堂がらんどうの中に残るは我輩とペンばかりである。彼は立板に水を

流すがごとく媷々十五分間ばかりノベツになにか言つて  
 いるが毫ごうもわからない。能弁なる彼は我輩に一言の  
 質問をも挟さしはさましめざるほどの速度をもつて弁じかけ  
 つゝある。我輩は仕方がないから話は分らぬものと諦あきら  
 めてペンの顔の造作の吟味にとりかゝつた。温厚なる二ふた  
 重えまぶた瞼と先が少々逆戻りをして根に近づいている鼻とあ  
 くまでくれない紅くれないに健全なる顔色とそして自由自在に運動を  
 縦ほしいまゝほしいにしている舌と、舌の両脇に流れてくる白き唾つば  
 とをしばらくは無心に見詰みつめていたが、やがて気の毒な  
 ような可愛想おかしのようなまた可笑おかしいような五目鮎司ごもくずししのよう

な感じが起つて来た。我輩はこの感じを現わすために唇を曲げて少しく微笑を洩もらした。無邪気なるペンはその辺に気のつくはずはない。自分の嘸はなしに身が入つて笑うのだと合点がてんしたとみえて赤い頬ほに笑靨えくぼをこしらえてケタケタ笑つた。この頓珍漢とんちんかんなる出来事できごとのために我輩はいよいよ変テコな心持になる、ペンはますます乗気のりきになる、始末がつかない。彼の言うところをあそこで一言こゝで一句、分つたところだけ綜合してみるとこういうのらしい。昨日差配人が談判に来た。内の女連はバツが悪いから留守を使つて追り返した。この玄関げんかんぼらいの使命まことを完う

したのがペンである。自分は嘘をつくのは嫌だ。神さまに済まない。しかし主命もだしがたしで付得已嘘をついた。まずたいていこゝら当りだろうと遠くの火事を見るように見当をつけてようやく自分の部屋へ引き下った。

我輩のトランクと書籍は今朝三時ごろ主人が新宅へ運んでしまったので、残るのは身体ばかりだ。なんとなく寂漠の感がある。夜の八時ごろにコツ／＼戸を叩いてはいつて来た——例のペンが——今日差配人が四度来たという注進だ。それからなにかいうが少しも解しかねる。あまり面倒だから善い加減にして追さげる。……十時ごろに

またペンが来た。今度差配が来たらどう仕ようという。今度は相談のためだ。心配するには及ばんといつて慰めて引きさがらせる。十時半になるがまだ内のものは帰らない。もしこゝの亭主ていしゅが詐欺師さぎしであつて我輩を置き去りにして荷物だけ取つて行つたとすれば我輩はアンポンタンの骨頂でさぞかし人に笑われるだろうと気が付いた。やがて門の戸のあく音がする。帰つたらしい。まずアンポンタンにならずに済んだ。難有ありがたいと寝る。

翌日が四月二十五日、九時ごろ起きて下へ行くと主人夫婦が今朝飯をすましたところだ。我輩が食卓に就くの

を相<sup>あい</sup>凶<sup>げう</sup>に昨夜の騒動を御存じですかと神さんが尋ねた。  
我輩は三階に寝るのである。下でどんな事があつたか少しも知らない。騒動つてなにがあつたのですと聞くと、例の差配人との悶<sup>もん</sup>着<sup>ちやく</sup>一件である。昨夜彼等が新宅から帰って家へはいるとたん門口<sup>かどぐち</sup>に待ち設けていた差配人は、亭主が戸をしめる余地のないほど早く彼等に続いて飛び込んで、なぜ断りなしにしかも深夜に引越<sup>ひっこし</sup>をするそれでも君は紳士かと言うと、我輩が我輩の荷物をわきへ運ぶに誰に断<sup>ことわ</sup>る必要がある。また何時に荷を出そうとこっちの勝手<sup>かて</sup>じやないかと亭主が抗弁する。それからだ

んだん議論に花が咲いて壮語四隣を驚かすという騒ぎであつたそう。元来この家は神さんの名前でかりている。ところが七年前に少々家賃を滞とどまおらしたのが今日まで崇ただつていて出ることができん。しかも彼の財産は早晚家賃のかたに取られるという始末だ。しかし憐あわれなる姉妹はべつだん取押とりおさえられて困るような物も持っていない。差配もそれには目をつけておらん。たゞこの老差配の目ざしているのは亭主その人の家財にある。亭主も二十世紀の人間だからその辺に抜ぬかりはない。代言人の所へ行つてちゃんと相談している。日没後日出前なれば彼の家

具を運び出しても差配は指を啣くわえて見物しておらねばならぬということ承知している。それだから朝の三時頃から大八車を傭やとつて来て一晩寝ずにかゝつて自分の荷を新宅へ運んだのである。彼はすこぶる彪ぼう大なるシマリの顔をしている。そこで申もうし訳わけのためには少々鼻の下へ髭ひげをはやしてはいるが、なか／＼差配に負けぬ抜ぬ目めのない男と見える。

我輩は亭主よろしに自分の身体はいつ移れるのかと聞いたならば今日よろしでも宣よろしいというから、午飯ひるめしのあと妻君とともに新宅へ引き移ることにした。



神さんと二人で午飯を食っていると亭主が代言人の所から帰って来て神さんに、お前一つ手紙をかいて差配の所へ郵便でやれ、書留かきどめにしなくてはいかんといつてまた出て行つた。神さんはサラ／＼になにか書きはじめる。どんな手紙をかくか少々見たい心持でもある。やがて神さんは書きおわつて「ちよつと〇〇さんこういう手紙なんです聞いてください」と高慢な顔をして手紙を読みはじめる。「拝啓 妾わたくしは驚き入り申し候そろ。……どうです、もう少しゆつくり読みましようか……妾は驚き入り申し候。昨日は三度ならず四度までも留守宅へ御来臨のうへ

下婢かひに向つて妾等身の上に関する種々なる質問を発せられ、そのみならず無断にて人の家を搜索なされ、あまつさえ下婢に向つて妾はレデーの資格なきものなりなどよけいな事を吹聴ふいちやうせられ候さふらふよし、元来右はいかなる御主意に御座候や伺ひたく候。この乱暴なる貴下の挙動に対し妾は弁解を求むる権利ありと存じ候。……こういうのです。これがね策なんですよ」というから我輩も少々驚き入いり申しておるところだが、策っていうのはどんな策なんですと聞くと、先生いよく得意だ。ようござんすか、お手紙を書いてちやんとこの通り控えをとっておく

でしよう、先方でもしこの事件を裁判沙汰にする日には  
 これが証拠になって差配が乱暴を働いたという種たねになる  
 のですよ。今までは女二人だと思つてずいぶん勝手な事  
 ばかりしたのですが、今じや男が付いているからそうば  
 かり踏みつけられちゃいませんのさ、と間接に亭主の自  
 慢おんを仰せられた。それからお待まち遠ど様おさまそれでは出掛でましよ  
 うと言うから出掛けた。我輩は手提革鞆てさげかばんの中へ雑物を押  
 し込んですこぶる重いやつをさげてしかも左の手には  
 蝙蝠こうもりとステッキを二本携えている。レデーは網袋の中へ  
 渋紙包を四つ入れて右の手にさげている。この渋紙包の

一つには我輩の寝巻とヘコ帯がはいつているんだ。左の手にはこれも我輩のシートを渋紙包にして抱かえている。両人とも両手が塞ふさがっている。とんだ道行みちゆきだ。角まで出て鉄道馬車に乗る。ケニングトンまで二銭宛ずつだ。レデーは私が払っておきますと行って黒い皮の墓口がまぐちから一ペネー出して切符きっぷ売うりに渡した。乗合は少ない。向側むかうがわに派出はでななりをしている若い女が乗っている。すると我輩の随行しているレデーが突然あなたはメリー・コレリのマスタークリスチャンをお読みなさいましたかと大きな声で聞いた。これは近ごろ十五万部売れたというちよつと有

名な本だ。我輩は書物は持つているがまだ読まないと答えた。「あの本はね、大變善くできていますね、どうも作者の宗旨がなんだか分らないのですよ。私の知っている者なんか皆んなコレリの宗旨はなんだろうって噂うわさしていますよ」とますく向側の婦人に聞えよがしである。自分だって読んだこともないのに鉄道馬車の中なんかでよせば善いと思つたが、仕方がないからウンウンと生返事なまへんじをしていた。やがてケニングトンに着つた。ここで馬車を乗り換かえる。こんどは上へ上がろうと言うから階子はしごを登ってトップへ乗った。「この左ひだりにあるのが有

名な孤児院でスパージョンの記念のために作ったので  
す。「スパージョン」ていうのは有名な説教家ですよ」  
「スパージョン」ぐらい講釈しないだつて知ってい  
腹が立たったから黙だつててやった。「だんく、木が青くな  
つて好い心持こころもちですわね、二週間くらいまえからズツト景  
色が変わってきましたわね」「さよう、時にあすこに並んで  
いるのはなんていう樹きですか」「あれ？ あれはポプ  
ラーでさあね」「へエーあれがポプラーですか、ナール  
ほど」我輩は感嘆の辞を発した。神さんはすぐツケ上あがる。  
「ポプラーはよく詩に咏えいじてありますよ、『テニソン』

などにも出ています。どんな風のない日でも枝が動く。アスペンともいいます。これもたしか『テニソン』にあったと思います」と「テニソン」専売だ。そのくせなんの詩にあるとも言わない。我輩は面倒臭いというふうでウン／＼言うのみである。向うの敷石の上を立派な婦人が裾すそを長く引いて通る。「家の内でのお引きずりには不賛成もありませんが、外であんな長い裾を引きずって歩ある行くのはあまり体裁の善いものではありませんね」と裾短かなるレデーは我輩に教うるところあった。ようやく「ツーチング」という処へつく。今度はえんたろうばしや円太郎馬車で

新宅の横町の前まで来た。「どれが内うちですか」と聞いた。向うに雑な煉瓦れんが造りの長屋が四五軒並んでいる。前にはなんにもない。砂利じゃりをほった大きな穴がある。東京の小石川いしかわ辺の景色だ。長屋の端の一軒だけ塞ふさがっていてあとはみんな貸家の札が張ってある。塞がっているのが大家さんの内でその隣が我輩の新下宿、彼等のいわゆる新パラダイスである。はいらないさきから聞しに劣る殺風景な家だと思つたが、はいつてみるとなおく不風流だ。加之くわうるにどの室へやにも荷物が抛ほうり込んであつて、まるで類焼後の立退場たちのきばのようだ。たゞ我輩の陣取るべき二階の一間



だけが少しく方付かたづいてオラレブルブルになっている。以前の部屋よりも奇麗だ。装飾もまず我慢がまんできる。やがて亭主が出て来て窓掛をコツく打ち付つける。ストーヴの上へ額をかけるが「ミツスルトー」という額はいかゞです、あれは人によると嫌きらいますがちよつと御覧に入れましょうと言って持って来て見せた。なんでもない裸体画の美人だ。「ハ、ー裸体画ですな、結構です」と冗談じょうだん半分にいったら「へ、へ、私もちつとも構いませんがね」とコツコツ釘くぎをうってかける。「どうですこれで角度は……も少し下向したむきに……裸体美人があなたの方を見下みおろすように

——宣よろしゅうございます」。それから我輩の書棚を作つてやるといって壁の寸法と書物の寸法をとつて「グールドナイト」といって出て行つた。

門前を通る車は一台もない。往来の人声もしない。すこぶる寂寥せきりようたるものだ。主人夫婦は事件の落着するまでは毎晩旧宅へ帰つて寝なければならぬ。新宅には三階に寝る妹とカーロー君とジャック君とアーネスト君である。カーロー君とジャック君は犬の名であつてアーネスト君はこゝの主人の店に使っている若き人間の名である。我輩の敬服しかつ辟易するベツジ・パードンは解雇

されてしまった。我輩は移転後にこの話を聞いて憮然ぶぜんとして彼の未来を想像した。

ロシアと日本は争わんとしては争わざらんとしつゝある。支那は天子蒙塵もうじんの辱を受けつゝある。英国はトランスヴァールの金剛石を掘り出して軍費の穴を填うめんとしつゝある。この多事なる世界は日となく夜となく回転しつゝ波瀾はらんを生じつゝあるあいだに我輩のすむ小天地にも小回転と小波瀾があつてわが下宿の主人公はその膨大なる身体を賭としてかの小冠こか者差配じゃさいと雌雄を決せんとしつゝある。しかして我輩は子規しきの病気を慰めんがためにこの

日記をかきつゝある。四月二十六日。

(明治三四・五―六「ホトトギス」)





日本文学電子図書館

---

## 倫敦消息

著者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底本 「漱石全集 第1卷」角川書店  
昭和42年10月10日 8版発行

---



日本文学電子図書館